
桜散るころに 【上】

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜散るころに 【上】

【Nコード】

N77200

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

昭和初期の恋愛小説を目指しました。高等学校生の清は同い年の千代子の事が好き。三度告白をするものの、千代子は曖昧な返事しかしてくれないので…。両想い悲恋です。

（前書き）

昭和初期の恋愛小説を目指しました。学校制度がよく解っていませんが、そこはあまり突っ込まないで頂けると……！（とりあえず男子は17〜20が高等学校生、それ以上が大学生ということ……。女子は17以上が高等師範学生。大正8年より前の学校制度資料を参考にさせていただきました） 悲恋です。 本来消す予定ではなかったこの小説を他のものと間違っって消してしまったので再投稿です<>

「好きです、千代子さん」

「うん、ありがとう」

期待外れの答えを言われて清は帽子のつばを指つかんで下げる。

三度目の告白にして三度目のこの回答だったので彼はもう溜息を吐く余裕すらなかった。

桜散るころに

千代子という女性を好きになったのはいつの事だっただろうか。はつきりとは覚えていないが、自分が高等学校に入ってからであることは確かだ。学校の帰り道、いつも通り本を読みながら歩いている僕に自転車がつかりそうになった時、さっと手を引いて事故を防いでくれたのが彼女だった。思えば一目ぼれだったのだろう。

彼女は僕と同じ年の高等師範学生だ。三つ編みの良く似合う文学少女で、よく興味深い本の話で盛り上がった。僕が何か話すたびに笑顔でうんうんと頷いてくれる姿はとても愛らしく、その頃はもう既に惚れていたのだと今更ながら思う。

最初の告白は、出会って半年後の春だった。下を向いて顔を真っ赤にしながら思いを告げた事は今でもよく覚えている。けれども彼女がうんともすんとも言ってくれないので顔を上げた時、千代子さんは困ったように笑って「ありがとう」と言ったのだ。それが、彼女の答えだった。否定するでもなく、肯定するでもなく、受け入れるだけだった。

二度目の告白は夕焼けの綺麗な日だった。一日目の告白からさほど

日数は開いていなかったと思う。今思えば意味深な返答をした彼女の答えが数日で変わる事はないであろうが、その時はひたすら行き場の無い想いを片付けてしまいたかったのだ。当然の事であるが、彼女の答えは前と全く同じものだった。けれどもあの時と比べて返答するのがとても早かった。少しくらい考えてくれてもいいではないか、それとも僕はそれにすら値しない存在なのだろうか？そんな考えが一日中頭の中を駆け巡っていた。

そして三度目の告白をしたのが半年後、つまり今まさっきの事である。彼女の口から出た言葉は期待していたものではなかったが、予想していなかったと言えば嘘になる。千代子さんは下を向いて申し訳なさそうな顔をしている。こんな顔をするくらいなら否定の言葉の一つや二つを言ってくればいいのに。そうすれば僕だって少しは気持ちの整理がつくかもしれない。けれども「ありがとう」なんて好意があるとも受け止められる言葉をそんな顔で言われてしまった。僕だって諦めきれなくなるのだ。

「千代子さん、他に僕に言うことはないのですか？」
僕は顔を真っ赤にさせたまま胸を張って千代子さんに詰め寄るが、彼女はその場に立ったまま動じない。

「他に？」

「ありがとう、の続きはないのですか？」

「たぶん、ないです」

その言葉を聞いて僕は落胆する。また曖昧な返事をしてくれたものだ。

たぶんなんて言葉を付けられてしまつては余計に気になる。

「でも……しいて言うなら……」

「言うなら？」

僕はほんの少しの期待を胸に千代子さんの目をじつと見る。
すると今度は彼女が俯き、僕の右手取るとかすれた声で話を続けた。

「貴方は私の何を知っているというのですか？」

それから僕と彼女の距離は少しずつ遠くなっていた。正確には、僕がいつも彼女と会う場所を避けて学校から帰るようになってしまったのだ。彼女の事が嫌いになってしまったのではない。ましてや、彼女に会うのが気まずいなどという生半可な理由でもない。ただ、彼女の問いの答えを見つけるまでは会うべきではないと僕が勝手に判断しただけだ。

あの日から僕は考えに考えた。僕が彼女について知っていることを頭の片っ端から思い出して考えた。まず第一に彼女は文学少女である。僕と同じ年で本を読むのがとても好きな三つ編みの似合う女の子だ。それから、由緒正しい家柄の娘であるということも知っている。だからこそ僕は一線を踏み間違えないように今日まで接してきたのだ。彼女と会うのは川辺か土手のみ。それ以上先には行つてはならない気がしていた。そして彼女も同じく、必要以上に僕について聞こうとしなかった。彼女について僕が知っていることはそれだけだ。これしか知らない僕が彼女を好きになつてはならないのだろうか……。

事件が起きたのは例の日の2週間後だった。彼女が一線を踏み越え、僕の学校が終わる時間に校門の前で待っていたのだ。僕は彼女を見つけるとすぐに手を引いていつもの土手まで引つ張って行った。土手まで行くには20分ほど時間がかかるが、その間も僕らは無言だった。

「千代子さん、如何して」

土手に着くと僕は彼女の手を軽く握ったままそうきいた。

「嬉しかったです」

「？」

「三度も、その、面と向かって言ってくれて本当に嬉しかったです」
彼女が言葉を選んでいるのが解ると、次第に顔が熱くなってきた。

「あの時言ったことは、本当に深い意味は無かったです。どうやって断ろうか考えてたからきつい言い方になってしまっ……。」

「……………」

「けれども私には、決まったお相手が既にいて」

「…………え？」

「三つほど上の帝国大学生の方で、親は私が学校を出たらすぐにでも言っています。私自身もその方を、好いています……………」

冷たい風がひゆるると二人の間を通り抜ける。

僕は彼女の手をそつと放すと帽子のツバを下げて口を開いた。

「……………そう、ですか」

口から出てきたのがその一言だけだったことに僕は絶望した。

「千代子さん、これ…………？」

三度目の告白の日から数か月たったころ、僕と千代子さんは川辺で互いに好きな本を交換して読んでいるところだった。天気の良い日で、心地よい風が吹くたびに千代子さんの前髪が静かに揺れる。

「うん？あ、それは」

そう言っただけで彼女が手に取ったのは、僕が彼女の貸してくれた本のページをめくった時に出てきた押し花だった。鮮やかな紫色の花が和紙の上に乗っていて、左下の方には筆で小さく千代子と書いてあった。

「しおり、ですか？」

「はい、賢治さんが作ってくださったものです」

「そうなんだ、綺麗ですね」
そう言つて僕が笑つと千代子さんは申し訳なさそうに眉を下げて笑つた。

賢治さんというのは千代子さんの婚約者の事だ。

あの日は結局そのまま家に歸つてしまつたのだが、翌日学校歸りに土手を通るといつも同じ場所に彼女がいたので、僕も前と変わらぬ素振りで近づいた。

そしてその時話題に出たのが賢治さんの事だつた。

僕とは違つ高等学校に通う学生で、家柄のいいお坊ちゃまだそうだ。僕の恋心はというとまだ心の内に存在しているのだが、もう思いを伝えようとは思っていない。

僕は千代子さんの答えが聞けただけで十分だつた。

不満があるにせよ、伝えたところでどうにもならないことを僕はすでに知っていた。

「千代子さん」

彼女は僕が名を呼ぶと本を読むのをやめてこちらを振り向いた。

僕はそれと同時に立ち上がると帽子をかぶり、ツバを握つたままかすれた声で、でもはつきりと言つた。

「もう、貴方とは会えません」

（後書き）

桜散るころに 【下】 に続きます。（投稿済み）
感想、アドバイスをいただけると私が飛んで喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720o/>

桜散るころに 【上】

2010年11月8日00時38分発行